

Ⅲ 分科会報告

ポストGIGAスクール時代における外国語教育のあり方

～コミュニケーションの本質とは？～

池田 勝久（文部科学省初等中等教育局主任教科書調査官）

1. はじめに

この分科会では、「ポスト GIGA スクール時代における外国語教育のあり方」というテーマのもと、新たな外国語教育の必要性について論じた。変化の激しい現代において、教育の原点に立ち返り、未来を担う子供たちにとって必要な力を育むにはどうすればよいのか、マクロ的な視点から日本の外国語教育の現状と課題、そして未来への展望について考察した。

2. GIGA スクール構想 2nd Stage

文部科学省は 2019 年に全国の児童・生徒に 1 人 1 台のコンピューターと高速ネットワークを整備する GIGA スクール構想を始めた。当初は 5 年間で進める計画であったが、新型コロナウイルスの影響により前倒しされ、2021 年度には 1 人 1 台教育用端末の整備がほぼ完了した。本年度からは GIGA スクール構想セカンドステージが始まっているが、これまでの GIGA スクール構想の成果と今後の方向性を確認した。

2.1 GIGA スクール構想誕生の背景

2019 年にスタートした GIGA スクール構想は、当時、学校の ICT 環境整備状況が脆弱であるとともに、地域間での整備状況の格差が大きい危機的状況であった背景から誕生した。また、学校外における平日のデジタル機器の利用において、勉強や宿題に使われる時間が OECD 平均より少ないのに対し、ゲームやチャットに使われる時間が OECD 平均より多い（2018 年 PISA 調査）と言う文部科学省の認識もあった。

2.2 GIGA スクール構想ファーストステージの成果と課題

ファーストステージでは、新型コロナウイルスの影響により GIGA スクール構想が前倒しされ、2021 年度には端末整備がほぼ完了した。これは、日本の教育にとって歴史的な転換点と言えるだろう。これにより教科書・教材のデジタル化、個別最適・協働的な学び、働き方改革に変化が見られた。2024 年度から始まったセカンドステージでは、端末の更新、日常的な活用、そして生成 AI の活用などが課題となっている。

- ① 端末の活用を日常化：教師の指示により端末を使用するのではなく、学習者の判断で端末の使用を判断させたい。それにより、学習活動全体に自然に溶け込むように活用していくことが重要である。

- ② 学習の質的転換：デジタル教科書や生成 AI などの活用を通して、学習者主体の学びを促進し、深い学びを実現する必要がある。
- ③ 教師の ICT 活用スキル向上：教師が ICT を効果的に活用できるよう、研修体制を充実させる必要がある。
- ④ 継続的な改善：社会の変化や教育現場のニーズを踏まえ、GIGA スクール構想を継続的に改善していく必要がある。
- ⑤ 自治体への伴走支援：国としての支援体制の変化や自治体における主体的な取り組みの重要性が強調されている。

2.3 学習指導要領と GIGA スクール構想

GIGA スクール構想は、次期学習指導要領改訂にも大きく関係している。学習者主体、多様な学びを実現するために、デジタル教科書や端末の本格的な活用が期待されている。例えば、これまでの教科書は「教師が教えるための教材」であったが、セカンドステージ終了時には「子供が自立した学習を行うための学習材」となることが予想されている。

3. 令和の日本型学校教育とデジタル教科書

GIGA スクール構想下で、デジタル教科書が学習指導要領改訂のキラーコンテンツと成りうることを「令和の日本型学校教育」「個別最適な学び」「協働的な学び」といったキーワードを使って説明した。

3.1 百年に一度の教育改革

これまでも「百年に一度の教育改革」という言葉はよく使われてきたが、今回は本物と言えるだろう。社会構造、経済状況、そしてテクノロジーの進化、これらの変化は、まさに歴史の転換期と言えるほどのものである。なぜ今、百年に一度の教育改革を進めなければならないか、その理由を、社会背景を押さえながら解説し、これからの時代にどんな人材が必要とされるのかも考察した。

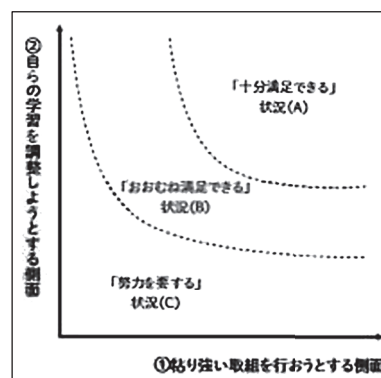
- ① グローバル化：在留外国人や外国人旅行者の増加、企業の国際的な競争激化などにより、多様な文化や価値観への理解、コミュニケーション能力の重要性が高まっている。
- ② 人口減少・少子高齢化：核家族化や一人親世帯の増加により、子供たちが多様な他者と関わる機会が減少している。学校は、社会性を育むための重要な場としての役割を担う必要がある。
- ③ デジタル化（Society5.0）：AI やロボットの台頭により、単純労働は代替され、ホワイトカラーの仕事も減少していく可能性がある。そのため、人間ならではの創造性や問題解決能力、コミュニケーション能力が重要となる。
- ④ 変化の激しい、不確実性の時代：学習院大学の滝沢教授によれば、人的資本の価値は年 40%のペースで失われているという。変化に対応し、常に学び続ける姿勢が求めら

れる。

- ⑤ 人生 100 年時代：長寿化に伴い、学び直しやキャリアチェンジが当たり前になる時代である。変化に柔軟に対応できる能力を育む必要がある。
- ⑥ 労働生産性の課題：これらのメガトレンドを踏まえ、日本が抱える労働生産性の低迷という課題を解決するためには、従来の画一的な教育から脱却し、一人ひとりの個性や能力を最大限に引き出す「個別最適化」された教育が不可欠である。

3.2 少ない人口で生産性を高める

今後の日本社会を維持・発展させていくには、「AI・ロボットとの共存」や「生産性の高い人材の育成」が求められる。教育においては、一部の若者をグローバルに活躍させるだけではなく、全ての若者が地域やいろいろな場所で司業に尽くしていく姿を描かなければならない。と同時に、若者を育てる教師の働き方改革も喫緊の課題である。



上のグラフ（主体的に学習に取り組む態度の評価のイメージ「学習評価の在り方ハンドブック」より）からもわかるように、努力の量だけでなく、自己調整能力も評価の対象とするもので、これからの時代に求められる主体的な学習の姿を示唆している。つまり、残業をたくさんすることが評価される時代ではなく、発想力・創造力を最大限に発揮し、自らの取り組みをメタ認知して調整する側面が重要視されているのである。

3.3 個別最適化の必要性

従来の画一的な教育では、一部の優秀な人材が全体をコントロールしていく大量生産大量消費の時代には向いていたが、このままではこれからの変化の激しい社会を生き抜くことはできない。一人ひとりの個性や能力を最大限に引き出す個別最適化された教育が、これからの時代には必要不可欠なのである。

3.4 学習者主体の教育

令和の日本型学校教育では、個別最適な学びと協働的な学びが重視されているが、これまでも「個に応じた指導」や「学び合い」という言葉はかなり長い期間使われ続けてきた。従来との違いは、「子どもの側に立ち、子どもを主語にする」という学ぶ側からの視点で捉え直すということだ。まだまだ教師主導で行われている学校教育を「学習者自身が主体的に学び、多様な他者と協働する」姿に変革することが重要である。

3.5 自律的な学習者の育成

小学校、中学校においても、「主体的」よりもさらに高次の「自律的な学習者を育成する」ことが求められているのではないかと考える。なぜなら GIGA 端末の持ち帰りにより、家庭

学習における自己管理能力が重要となるからである。他律ではなく、自分が立てた規範に従って学ぶマネジメント力が求められる訳である。

3.6 デジタル教科書の役割

これまで述べたように、GIGA 端末でいつでも使うことができる学習者用デジタル教科書は、学習者主体の教育を実現するための鍵となる。自宅学習や個別学習など、多様な学習場面で活用し、学習者主体の学びや多様な学びを保障する。

4. これからの外国語教育の姿

学習者用デジタル教科書が英語へ優先的に無償給与されている背景を伝え、今後求められる外国語教育のあり方について提案した。その際、機械翻訳や生成 AI などのテクノロジーとどう向き合っていけばよいのか、これからの外国語教育における教師に求められる資質・能力について議論した。

4.1 外国語教育とデジタル教科書

外国語教育において、学習者用デジタル教科書が優先的に無償提供されている理由は、音声や映像コンテンツが豊富であることから、単に学力向上のためのツールとして有効であると考えられているだけではない。問題解決のためにデジタルを上手に活用する態度や自分の学びを自分で選択・決定・調整していくスキルを身に付けていくことも求められており、外国語教育のデジタル化により、学び方を改革していくことも求められている。

4.2 AI と外国語教育

文部科学省の令和 7 年度予算案には、「AI 英語活用リーダー（仮称）」を選定し、AI を英語教育で積極的に活用していくことが求められており、事業予算もかなりの額になることが予想される。外国語学習での AI は、発音練習、スペルチェック、機械翻訳など、様々な場面で活用することができ、AI を活用することで、学習者は効率的に学習を進めることが可能となるだろう。

4.3 教師の役割の変化

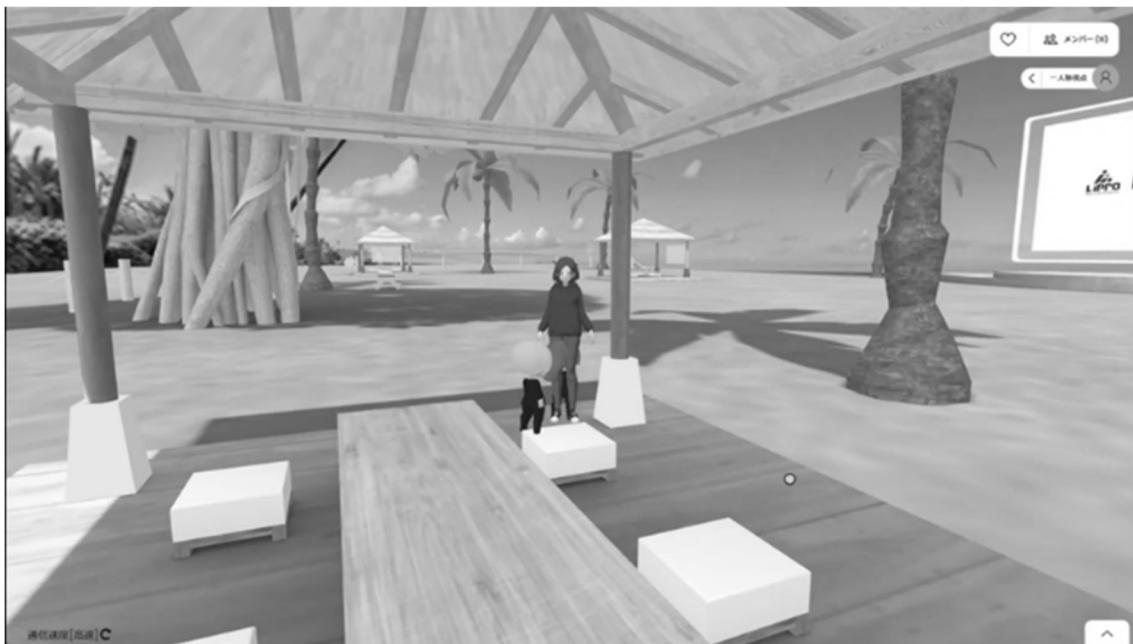
AI が台頭する中で、教師の役割も変化していくことが予想される。発音練習や英語の正確さなどの「知識・技能」に関わる部分は、一斉指導から個別指導へと変わっていくだろうし、AI と会話することで内容の適切さなどの「思考・判断・表現」に関わる部分にも AI が適切な支援をすることになるだろう。個々の学習ログの蓄積により、学習者が間違えやすい傾向がわかり、よりの確な AI による支援が可能となる。テクノロジーの活用によって、学習者自身が自己調整しながら学習の最適化を図るのである。そうなると、外国語教育における教師の役割はどうなるのだろうか。教師は、AI では代替できない非認知能力の育成や、学習者の個別最適な学びを支援する役割を担うことが重要になる。AI と異なり、

人は感情で動く。相手がどんな経験をして、何を考えているのか、といったコミュニケーションの本質的な部分は、English Teacher の役割だけでなく、人間としてのコーチングが求められるようになるだろう。さらに、個別学習と協働的な学び、AI の活用とオーセンティックな言語活動をどのように組み合わせていくのかの授業デザインも教師に求められる重要なスキルになるだろう。

4.4 メタバース空間の活用

一斉授業で知識・技能の習得にかけていた時間が減少し、よりオーセンティックなコミュニケーション活動が求められる。目的・場面・状況が丁寧に設定された言語活動が充実してくるだろう。ただ、交流活動を行うには人・モノ・時間が必要となり、頻繁には行えないし、教室内での場面設定では限界もある。その対策の1つとして、メタバース空間の利用が考えられる。

メタバース空間を活用することで、よりリアルなコミュニケーション体験を提供することができる。学習者は、仮想空間で外国語を使う機会を増やし、実践的なコミュニケーション能力を身につけることができる。アバターによるコミュニケーションは心理的ハードルを下げたり、大きなダメージを受けることなく、躓きや失敗を体験する機会を得られることは学習者の成長にとって欠かせない部分である。



4.5 授業デザイン案

従来の学習指導案とは異なる「授業デザイン案」の例を紹介した。新しい教育観との親和性が高い「授業デザイン案」には、以下の特徴がある。

- ・大まかな流れ：課題解決、個別探求、協働学習、振り返りといった、学習活動の大まかな流れ(ステージ)を記述し、指導者の指示や予想される学習者の行動等は記載しない。

- ・手立て：各ステージにおける達成のための指導者の手立てを丁寧に描く。
- ・教育活動を支える経営活動：具体的な教材、ICT の活用方法、学習形態、物的支援などのマネジメントの部分を記述する。

5. 求められる指導者の資質・能力

1 人 1 台端末により実質的な自律的学習者の育成が進められる。そこで求められる教師像は以下の通りである。

5.1 教育の DX による求められる教師像の変化

学び方が単一だとそこで躓いた学習者は、学ぶ内容を身に付けることを諦めてしまうかもしれないが、学びの選択肢を広げることで、これまで救えなかった学習者を救うことができる。例えば、「文章を読む」場面で、紙で読むことが苦手な学習者は、デジタルで読んだり、デジタルで聞きながら読んだり、自分に合った学び方を選べるように、教師が学習者の選択肢を複数用意する。従来のように、教師が定めた学び方に沿って、手取り足取り導く方法では、失敗はしないかもしれないが、学習者の思考は停止しているだろう。このような教師への忠誠心を試すような指導は、大量生産大量消費の時代にはよいかもしれないが、これからの時代にはそぐわない。

5.2 英語は最も期待されている教科

2022 年度から英語の学習者用デジタル教科書だけは、小学校 5 年生から中学校 3 年生まで全ての児童生徒に提供されている。英語という教科の特性として、音声や映像コンテンツを有効に使えるというメリットがあるという理由なのだろうが、単に学力向上のためだけではなく、教師は、学習者の主体性を引き出し、協働的な学びを促進する「令和の日本型学校教育」を目指していかなければならない。

5.3 AI による小学校英語のハードル低下

これまでは、小学校教師にとって、英語の運用能力という専門性が大きな負担となり、「働き方改革」の名のもと、外国語や外国語活動を ALT や専科教員に任せることが当たり前のような風潮が存在していた。しかし、この英語の専門性の課題は、AI によって克服することが可能となっている。適切な英文の作成や授業中の対話の例示など、ALT や専科教員に頼らなくても英語面での負担はかなり削減できる。これにより、小学校教師が得意とする「授業デザイン力」を発揮し、「令和の日本型学校教育」を担う新たな教師像を描けるのではないだろうか。

6. まとめ

「不易流行」とは、新しいものと従来のものとをそれぞれ大切にしていこうということではなく、まずは新しいものを積極的に取り入れ、その中で従来と変わらず大切であると納

得できるものを不易として再認識することである。未来を担う子供たちのために、教師自身の変化を恐れず、新しいことにチャレンジしていく姿勢を持つことが重要である。

これからの時代、教育には個別最適化と協働的な学びが求められる。教師は、AI や ICT を効果的に活用し、学習者一人ひとりの能力を最大限に引き出す必要がある。変化の激しい現代において、日本の教育が進むべき方向性を示唆し、教育関係者だけでなく、広く社会全体で共有すべき重要なメッセージを伝えられたのであれば幸いである。